

事務局便り

●50周年記念事業 2002年に予定されます日米フルブライトプログラム50周年記念事業につきまして、8月18日各地区同窓会長から成るフルブライト同窓会全国理事会が開かれ、まず第一段階として、各地区同窓会代表など50名からなる実行委員会を結成することが決まりました。

●同窓会費の徴収方法 8月18日に日米フルブライトプログラム50周年記念事業のことなどで、東京同窓会の臨時役員会が開かれました。席上、ときおり会員の方からご意見のある会費の徴収方法についても討議されました。預金口座からの自動引き落としにすること及び郵便振替用紙を送金料受取人負担の赤色用紙に変更することが検討されましたが、結論としては現状を維持することに決まりました。

自動引き落としにつきましては、人数が比較的少なく転居者も多いのに、年一回の引き落としでは非常に割高になります。また、振替用紙の通信欄はふだん行事に参加出来ない会員からの貴重なコミュニケーションの場であるから、現状を継続するようという会員のご意見があります。

自動引き落とし、振替用紙の種類の問題ともに、将来会費変更が必要になった時に再考しようということになりました。

●同期の人、専門分野の人 同期会や専門分野会を企画されるグループの方には、出来るかぎり資料リスト・ラベル等をお送り致します。ご遠慮なくご連絡下さい。

●同窓会事務局 同窓会事務局は地下鉄有楽町線の麹町駅のごく近くで、地下鉄半蔵門線の半蔵門駅からも5分位、JR四谷駅及び市ヶ谷駅からそれぞれ10分位の所にあります。お気軽にお立ち寄り下さい。

●フルブライト同窓会・財団・委員会の区別

フルブライト同窓生の多くの人にとって、下記の三つの組織の区別が分かり難いようですので改めてご説明します。

<日米教育委員会>日米両国政府によって作られている組織で、フルブライト奨学生の選考と奨学金の支給をします。私達同窓生も皆お世話になった組織です。

現在の住所は東京の赤坂見附の近くにあります。

住所：東京都千代田区永田町2-14-2

Tel : (03) 3580-3240

<フルブライト同窓会>(ガリオア・フルブライト同窓会)

かつてフルブライト(又は、ガリオア)奨学生だった人達を会員とするいわゆる同窓会で、全国11地区にそれぞれ地区同窓会が組織されています。全国的に関係のある問題、行事に対しては、地区同窓会の代表で組織されるガリオア・フルブライト同窓会全国理事会があって、東京同窓会が会長・事務局を兼ねています。

ガリオア・フルブライト同窓生の総数は約六千人ですが、既に亡くなられた方や海外に居られる方を除いた実数は約五千人で、そのうちの約三千人が東京同窓会に所属しています。

東京同窓会の事務所は東京・麹町の日本テレビの近くにあります。

住所：東京都千代田区二番町11-10

Tel : (03) 3221-1841

<フルブライト財団>(日米教育交流振興財団)

ご承知の通りガリオア・フルブライト同窓会では主としてアメリカからの奨学生の人数を増やすために、同窓生・企業から募金をしています。寄付者に税法上の便益が得られるように同窓会によって作られたのが、フルブライト財団(日米教育交流振興財団)です。

財団の事務局は東京同窓会と一緒にあります。



TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION

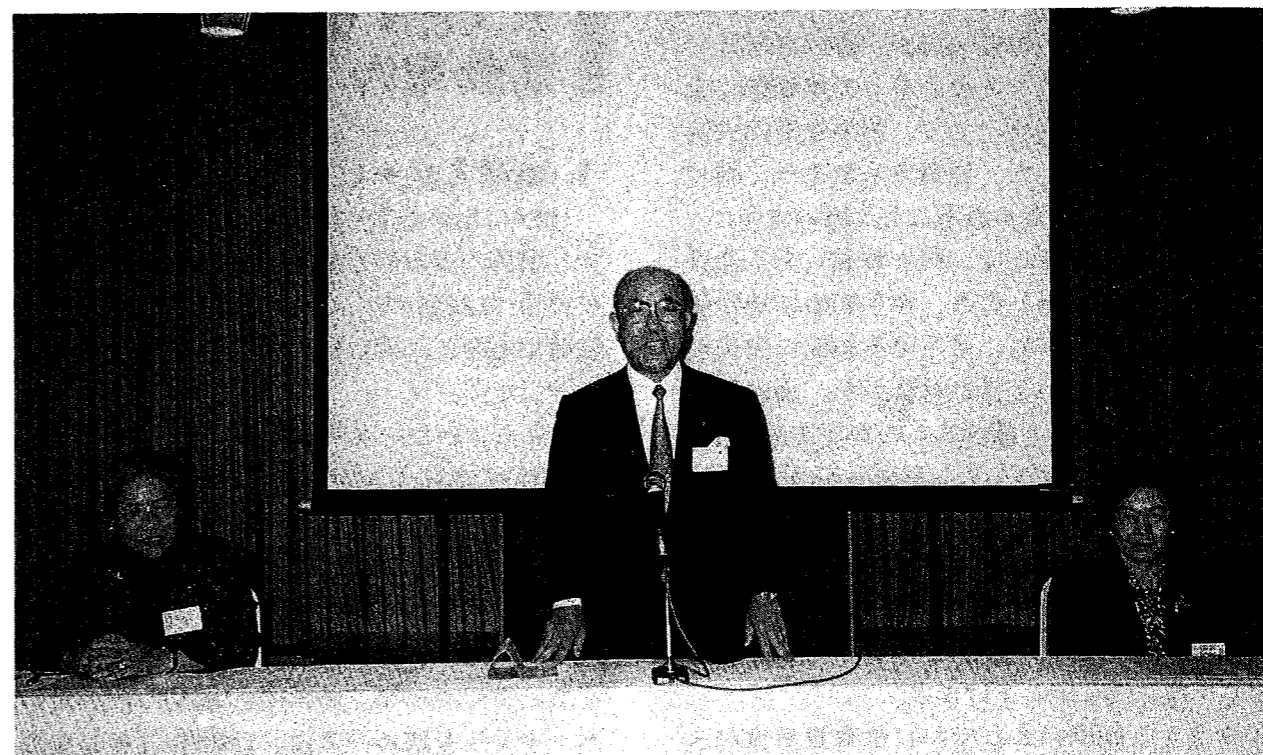
ガリオア・フルブライト東京同窓会

NEWSLETTER

No.12

OCTOBER 1999

1999年度 東京同窓会総会・懇親会 ～年次を越えて交流を深めた集い～



左から安成子副会長、橋本徹会長、佐藤ギン子副会長

ガリオア・フルブライト東京同窓会1999年度総会及び懇親会は4月15日(木)、東京有楽町の東京会館で開催されました。

今年の総会には72名の会員、家族が出席。また当日は日米教育委員会関係者等13名が列席され、総員85名でした。昨年は124名でしたが、今年は100名を切ってしまい残念でした。

しかし、引き続き講演会、懇親会ともになかなかの盛況で、年次、留学先を越えての交流を深めた同窓の集いでした。

総会は油原ゆう子さん(Alumni Meetings 副委員長)の司会により橋本会長の挨拶で始まり、続いて、小西輝明副会長からの同窓会募金及

び奨学生事業の報告、加藤弓弦事務局長からは会務及び会計報告並びに会員名簿発行についての報告がなされました。

これら報告の後、去る4月に逝去された川村元会長の在りし日の思い出を交え、旧知の間柄の渡邊宏元同窓会長が弔辞を述べられました。引き続き、出席者全員で黙とうを捧げ、故人のご冥福をお祈りしました。

総会に続く国立大蔵病院長・開原成允氏(1966年フルブライター)の講演は、小中陽太郎氏(Alumni Meetings委員長)が司会を務められましたが、予定の40分をオーバーするほどの熱気に包まれ、盛会でした。

編集後記

東京同窓会ニューズレターは年2回の発行を考えていますが、毎回お届けするのが、不定期となりがちで、会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしております。

前号(No.11)につきましても昨年末には出来上がっていましたが、本年3月会員名簿と一緒に全国の会員全員に送らせて頂きました。遅くなり失礼しました。

本ニューズレターが一人でも多くの会員の方に東京同窓会への関心を高め

て頂く一助にもなればと発行を続けております。

会員の皆様により身近な会報といたしたく願っております。皆様方のご意見、ご要望をお寄せ頂きたくお待ちしております。今後ますますのご多幸とご健康をお祈りいたします。(K.Y.)

会長挨拶 橋本 徹

ご紹介を頂きました橋本です。私は、富士銀行に就職しましてから3年後の1959年から60年にかけて、アメリカの片田舎と言いますとむこうの方におこられますが、Kansas州のLawrenceにありますカンザス大学の大学院に留学させて頂きました。アメリカの片田舎とはいえ、Heartland of the United Statesとも言われています。そこで1年間、じっくりとアメリカの文化について学ばせて頂きました。

アメリカで思いましたのは、国際的な理解、国際親善を進めるには、教育交流が一番大事だということであり、そのことを身をもって体験致しました。その後の私の仕事の上で、留学生生活は大変貴重な体験でありました。皆様方もおそらく同じようにお考えになっておられることと思います。そういうこともありまして、何かお返しをしなければと思っていましたところ、昨年初めに私の前任者の行天豊雄さんから、そろそろお前に会長役をパトタッチしたいと言われました。実は行天さんの後釜では大変だと躊躇もしたのですが、まあ恩返しの一つのいい機会かもしれぬということで、お受けした次第です。

同窓会の皆様には日頃アメリカからの留学生の受け入れ、その他の諸計画、行事に際し、ボランティアとしてご支援、ご尽力を頂き、本席をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

フルブライト制度のもとでの日米教育交流がスタートしたのが1952年ですので、2002年には50周年を迎えることとなります。皆様のご記憶のように1992年の40周年には多くの記念行事を行いました。次なる50周年に際しましては、40周年に勝るとも劣らない記念行事を催したいと考えております。これらの行事の内容につきましてはこれから詰めて参りますが、どうか皆様方からいろいろなアイデアを出して頂ければと思っております。今後とも同窓会に対し、皆様のご協力を仰ぎたいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。本日は大変ご多忙な中をご出席頂き有難うございました。

備別 川村茂邦氏を悼む

1988年から4年間、東京同窓会長を務められた川村茂邦氏(元大日本インキ化学工業社長、1956年フルブライター)が本年4月1日、呼吸不全のため都内の病院で亡くなりました。(享年70歳)

会員一同、ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、故人のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。



ホスピタリティ委員会の活動報告

1. 出迎えサービス

1989に始めた「出迎えサービス」は、ボランティアと家族の方々のご協力のおかげで、1998年末現在で延べ122名のアメリカン・グランティアーを成田空港で出迎え、第1日目の宿泊先に無事届けてまいりました。

こんなエピソードがありました。

3歳位の女の子を連れた若い母親のグランティアーが成田空港発のバスに乗る寸前になって、「この子が、どこかで人形を落としたので探してほしい」と頼むのです。ちょうど同じ便で到着していた2組のグランティアーの家族も、困った表情をしていました。というのは、みんなの最初の宿泊先の銀座第一ホテルを通るバスは、1時間に1本しかないので、そのバスがあと数分が出るというのに、たかが人形で全員が巻き添えを食うのはどうかと思ったのです。

その若い母親は、「あの人形はこの子にとっては、かけがえのない大切なもの。それを分かって欲しい」と半狂乱でした。

そこで、税関を出てからバス乗り場までをたどって探しましたが、分かりません。最後の手段は、税関の検査で通関中に落としたのに違いないと見当を付けて、乗って来た航空会社のカウンターにいた女性に話しました。するとその女性が親切に母親とその子連れて、一旦出たら入れないはずの税関の中に消えたと思ったら、喜色満面の母親と人形を抱えた女の子がすぐ出てきました。

バス乗り場に走っていきましたら、他の2組の

グランティアーが、バスの運転手に「待って欲しい」と頼んでいる最中でした。5分遅れでバス会社には迷惑をかけたが、一番喜んだのは、見つけてもらって持ち主の所に戻れた人形ではなかったでしょうか。

2. 米国人グランティアー歓迎会

恒例の歓迎会は、11月26日にグランティアーと家族、冠企業、日米教育委員会、同窓会員など昨年の80人より多い92名が集まって、六本木プリンスホテルで盛大に開かれました。

橋本会長の歓迎の挨拶の後、いつものようにグランティアーから、それぞれ流暢な日本語でユーモアをまぜて留学目的と自己紹介をして頂きました。いつものことながら、このパーティーは日本人同窓生によるアメリカン・グランティアーの歓迎会ですが、久しぶりに会う日本人同窓生の再会と談笑の場としても盛会でした。(委員長 太田隆次)



3. グランティアーの宇都宮旅行

早くも9回目となった宇都宮ツアーは、1998年11月24日から26日までの2泊3日の日程で、米国人フルブライターとその家族計11名で行われました。今回のツアーは、天候は3日間とも晴れ、日中の気温14度前後と大変行動しやすく、助かりました。

このプログラムの中心は宇都宮市の「いっくら国際文化交流会」会員宅でのホームステイで、今年も参加者全員がそれぞれのホストファミリーと楽しく貴重な時間が過ごせたと報告。今後のフルブライターにもぜひ推薦したいと高く評価していました。

いっくら国際文化交流会会長の長門芳子さんは、今回も自然体でかつ十分に吟味されたプログラム

を用意して下さいました。栃木県立美術館と日光自然博物館からは館長による歓迎と入館料の無料提供があり、そのほか日舞の披露、陶芸、書道のデモンストレーション、藍染工房や旧家の見学など、地元をあげての日本文化紹介でした。また宇都宮市はフルブライターが市長を表敬訪問した際、全員に宇都宮市の名誉市民証を授与しました。宇都宮市はフルブライターを「アメリカの頭脳」と呼んでいるそうです。

日程とツアー終了時間を六本木プリンスホテルでの歓迎レセプションの日時に合わせることで、ツアー参加者が宇都宮から東京の会場に直行するようにしたのは成功でした。今後もこの形式で続けられればと思います。一人でも多くのフルブライターが宇都宮ツアーを経験できるように、これからはもっと積極的に働きかけたいと考えています。(副委員長 葛城めぐみ)

4. 最高裁・国会見学

米国人グランティアーの最高裁及び国会見学が本年は5月18日に行われた。この見学会は東京同窓会が、最高裁と国会当局のご好意により毎年春に実施している。参加者は同窓会、日米教育委員会の関係者も加わり、総勢9名であった。

最高裁見学は午後1時、元フルブライターであった千種秀夫裁判官への表敬訪問で始まり、会議室における英語ビデオによる裁判制度の解説と質疑応答。その後、大法廷、小法廷、図書館、特別研究室等の見学が続き、午後3時半に退出した。法廷以外は非公開であり、最近警備も厳しい折柄、庁内奥深くにある千種裁判官室において、同裁判官を囲んで対談した。また記念写真を撮る機会もあって、グランティアー達は満足気であった。

続いて、国会に3時45分到着。本会議場、委員会室、御座所等の要所を見学した。議事堂中心部広間中央から天井を見上げ、「今ちょうど尖塔の真下にいるのですね」と言ったグランティアーの言葉が印象に残った。

午後5時過ぎ、議員会館に元フルブライターの津島雄二議員を表敬訪問した。同議員の流暢な英語による講話、質疑応答があり、ここでもグランティアー達は満足気であった。

この見学会は、午後半日の間に最高裁と国会を巡るので、時間的に大変窮屈であるが、遠隔地からの参加者の希望、便宜を考えるとやむを得ないと思っている。(担当副会長 高澤廣茂)

1999年度総会での各種報告

1999年度役員

- 会長：橋本 徹
- 副会長：佐藤ギン子(会長代行) 有馬朗人
小西輝明 松原亘子 高澤廣茂 安成子 白鳥正喜
- Foundation Liaison委員会：担当副会長：小西輝明
- Alumni Meetings委員長：小中陽太郎
副委員長：油原ゆう子/担当副会長：安成子
- Hospitality委員長：太田隆次
副委員長：葛城めぐみ/担当副会長：高澤廣茂
- Publicity委員長：川村敏久/担当会長：橋本 徹
- Administration事務局長：加藤弓弦
担当副会長：佐藤ギン子
- 監査役：堀憲明

1998年度募金データ

企業名等	金額(単位:千円)		
富士銀行	2,000	Y K K	10,000
J E F	8,377	東京チャリティゴルフ	5,925
三菱グループ	5,000	個人寄付金	1,700
トヨタ自動車	5,000	合計	38,002

1998年度決算

収入の部		支出の部	
会費	4,968,000	旅費交通費	237,392
寄付金	4,901,100	通信費	2,491,782
受取利息	61,367	印刷製本費	3,191,098
募金手数料	2,339,617	交際費	0
PC賃貸料	240,000	什器備品	505,255
雑収入	392	修繕費	0
		消耗品費	1,080
		地代家賃	288,685
		会合費	-391,929
		倉庫料	144,000
		事務用品費	203,980
		給料手当	3,721,332
		奨学生費	196,499
		支払手数料	13,483
		図書購入費	10,710
		会議費	144,270
		雑費	110,665
		予備費	0
当期収入合計(A)	12,510,476	当期支出合計(C)	10,868,302
前期繰越	11,429,153	当期収支差額(A)-(C)	1,642,174
収入合計(B)	23,939,629	次期繰越(B)-(C)	13,071,327

1998年度会務報告

- 98.04.17 1998年度総会・懇親会。講演者 行天豊雄氏。出席者 会員98名、その他26名、合計124名。
- 98.05.18 アメリカ人フルブライターの為に最高裁判所及び国会の見学会。参加者18名。
- 98.07.05 アメリカ人フルブライターの為に東京国立大劇場にて歌舞伎鑑賞会。出席者10名。
- 98/08-09 アメリカ人フルブライターを成田空港に迎。
- 98.10.19 第22回日米交流チャリティ・ゴルフ大会。参加者121名。募金額600万円余り。
- 98.11/24-26 アメリカ人フルブライターの為に宇都宮ツアー(日光東照宮、益子焼など)2泊3日。参加者12名。
- 98.11.26 アメリカン・フルブライターの歓迎会。出席者92名。
- 99.03 Newsletter No.11を発行。全国同窓会会員名簿を発行。
- 99.03.05 東京同窓会役員会。

1999年度予算

収入の部		支出の部	
前期繰越	11,060,472	旅費交通費	206,160
会費	5,000,000	通信費	1,399,092
寄付金	5,046,250	印刷製本費	3,890,000
受取利息	56,250	交際費	0
募金手数料	900,000	什器備品	500,000
PC賃貸料	240,000	修繕費	38,542
雑収入	0	消耗品費	5,450
		地代家賃	374,185
		会合費	-135,335
		倉庫料	193,929
		事務用品費	204,498
		給料手当	3,549,052
		奨学生費	228,671
		支払手数料	11,193
		図書購入費	11,185
		会議費	124,593
		雑費	143,598
		予備費	500,000
合計	22,302,972	合計	11,244,813
		次期繰越	11,058,159

成育医療について—母と子のナショナルセンター病院を—(要旨)

開原成允 (国立大蔵病院長)

私は、最近「国立成育医療センター」という名前の新しい病院と研究所を作る事業に携わっています。「成育医療」という言葉は聞きなれないかと思いますが、この病院は、一言で言えば、「子どもとお母さん・お父さんの病院」と行ってもよいと思います。なぜ、今、このような病院が日本で必要なのか、そして、その理念は何なのかについてお話してみたいと思います。

今、日本社会は、少子化の時代であると言われていています。これを統計的に示すことは容易で、「合計特殊出生率」(一人の女性が一生の間に生む子どもの数の平均値)は、1.3から1.4で、このまま進むと将来、日本人という民族は地球上から消滅するという計算になります。確かに、少子化の傾向は、先進国すべてに共通した傾向ですが、欧米諸国では、少子化は進んでも、何らかのバランスが働いてそれを回復させているようにも思います。日本は、そのバランスが働くのかどうかまだわからないところが心配なのです。

今、日本政府も国をあげて少子化対策を行おうとしています。これは、主として労働問題や経済問題からのアプローチであり、それも大変重要ですが、私は、もっと根底に、日本社会の子どもに対するイメージの問題があるように思えてなりません。日本では子どもを育てることのイメージは、「苦勞」のように思われます。例えば、障害児が生まれたら、事故にあったら、いじめられたら、受験に失敗したら等、心配はいくらでもあります。

この心配を取り除いていくことが私は最も重要な少子化対策ではないかと思っています。例えば、障害児が生まれても皆で助け合って障害児も満足な一生を送れるような社会、事故や急病が起きてもすぐ受け入れてくれる病院が近くにある社会、成績が悪くても別な才能を活かしていける社会、などであれば、子どもを持つことに対しては心配が少なくなり、逆に喜びが増してくることでしょう。勿論医学・医療のみで解決できない問題の方が多いのですが、その責任のいったんは医学も果

たすべきだと思っています。

このように考えて、私は今度できる国立成育医療センターを医学・医療の側からの少子化対策の一つのモデルにしたいと思っています。これまでの医学・医療に対する多少の反省の上に、私は重要な考え方が二つあると思っています。第一は、

「総合化」つまり縦割りを廃するということ、第二は需要者側の意見の反映と参加です。

病気を治療しケアをするには、一人の専門家だけではできません。例えば、障害のある子どもは一生にわたってのケアが必要な場合もありますが、それは、医学だけでなく、教育、福祉、一般社会との連繋の上にはじめて可能なことです。従って、成育医療の考え方は、生まれる前から子どもを作るまでを総合的に捉えて、対応を



考えていくということなのです。これが第一の「総合化」という意味です。

日本の病院は、これまでは医師の意見に基づいて作られてきました。例えば、今ある予算があったらこれを病室のカーテンを取りかえるために使うか、高度な医療器械を買うかを医師に聞けば、必ず、高度な医療器械を買うと答えるでしょう。これは医師としては当然のことです。しかし、もし良く事情のわかった患者に同じことを聞いたとしたら答えは違いかも知れません。欧米では、例えばお金持ちの患者が病棟を寄付するというようなこともあります。そうすると、必ず寄付した人の意見が反映されますから、患者にとって気持ちのよい病棟ができることになります。日本では、これまで患者側の意見を反映する仕組みがありませんでしたが、今後考えれば作っていくことはできるかもしれません。

日本社会では簡単ではなさそうですが、私は自分に対する一つの宿題として考えて、新しい病院でその仕組みを少しでも実現していきたいと思っています。

■Shigekoto Kaihara/1966年 Johns Hopkins大学留学
東京大学名誉教授